

連載
30

紀行

小田急電鉄・メトロはこね [北千住～箱根湯本]

東京メトロに乗り入れるロマンスカー、MSE。

ハッとするような存在感の色とフォルム。

平日の通勤時間、休日の観光のひとつがMSEで変わる。



1本の電車の存在が見なれた風景をガラリと変えてしまうことがある。

土曜日の朝、電車を待つ客で混み合う北千住駅の東京メトロ千代田線ホーム。そこにフェルメールブルーのボディにバーミリーオンオレンジの帯が入った車両がすべりこむと、待っていた若い男性や少年たちは「おおつ」と歓声をあげ、いつせいに携帯電話やデジタルカメラのフラッシュをたきシャッターを切る。

小田急の新型ロマンスカー600000形MSE通称「青いロマンスカー」はさわやかな空色の、セレブ感あふれる電車だ。

MSEの格別な「コンフォート」

現在MSEは、平日は朝夜の通勤特急として北千住～本厚木・唐木田間を「メトロさがみ」「メトロホームウェイ」の列車名で運行し、土休日は「メトロはこね」の名で北千住から箱根湯本までを主に運行する。この他にも季節にあわせて臨時特急が運行されている。

全席指定のロマンスカー特急券はインターネットや携帯電話で予約購入ができるし、空席があれば当日にホームの券売機で気軽に買うこともできる。

私は土曜の朝に「メトロはこね」に乗車した。ホームに残る人々の羨望のまなざしを受けながら車内に入ると、室内の木目調インテリアとLED式照明がリビングルームのような落ち着いた高級感を漂わせていた。

すぐ後ろの席の20代カップルの男性は「この電

コンフォート感を楽しむMSE、電車の旅。

車はカッコいいよね」と言い、女性は「中がステキね」と答えていた。それだ。「カッコよくてステキ」というのがこの電車の魅力であろう。

北千住を出発し、大手町、霞ヶ関、表参道とと停車するたびに乗客が増えて車内はにぎやかになってくる。観光の乗客が多いのでみなさん車内販売の缶ビールを飲んだりおしゃべりしたりで楽しそう。旅は目的地へ着くまでに過ごす時間も大事であり、ムードの良い電車は旅気分をおおいに盛り上げてくれる。

城下町・小田原を歩く

くつろいだ快適な旅を104分、目的地の小田原駅へ着いた。

大学卒業後、メーカーに勤めていた頃に工場や駅前ストアに何度か仕事で来たことはあるが、小田原の町をゆっくりまわるのは初めてだ。

駅構内の観光案内所で地図や資料をもらい、まずは町のシンボル小田原城を見ようと駅から近い城址公園をめざした。

戦国大名北条氏が居城とした小田原城は、江戸時代には徳川家臣などが住み、明治の御用邸時代を経て、昭和の戦後に天守閣が復興された。そびえ立つ天守閣は雄大な姿で、本丸の正門である常盤木門も堂々としている。

城のふもとには二宮金次郎(尊徳)を祀る「報徳二宮神社」がある。初めて知ったが、薪を背負い書物を読む少年・二宮金次郎は小田原出身なのだ。幕末に農家で生まれた金次郎は小田原藩や幕府



報徳二宮神社には小田原出身の二宮金次郎が祀られている。



雄大な天守閣がそびえ立つ。戦国大名北条氏の居城だった小田原城。

文・写真 田中ひろみ (脚本家)

text and photographs by Hiromi TANAKA

1959年東京都生まれ。早稲田大学教育学部卒業後、カネボウ宣伝部を経て、脚本家デビュー。
土曜ワイド劇場「法医歯科学の女」など多数。



に仕え飢饉に苦しむ人々を救い、各地の農村復興、財政立て直しの功績をたてた。彼の「至誠（まこところ）」や「二円観（ものごとを多角的にとらえる視野）」をもち万人が争うことなく幸せに暮らせる世の中づくり」という考えは現代でも大切だろう、と境内の像を見ながら思った。

漁港ゆえに「市の魚」も制定

お昼になったので、和食屋に立ち寄った。

働き者のご夫婦がやっている繁盛している店だ。明るい奥様の心配りが料理と一緒にこちらの心を温かくしてくれる。「天ぷら定食のアジ刺身つき」を食べたが、新鮮でとても美味しかった。アジは小田原市の「市の魚」になっている。「市の花」や「鳥」はよく見聞きするが「市の魚」が制定されているのは珍しくおもしろい。

食後の散歩がてら、御幸の浜から小田原漁港までぶらぶらする。雲が多い天気だが早春の海は波が光り、海鮮料理の食堂がならぶ漁港は観光客や地元の人々で活気があった。

多くの文化人に愛された温暖な気候

再び町へ戻り、町歩きを続ける。この町は広いので歩きやすい。道に迷ってもお城や海の方がわかれば自然と行きたいところへたどりつける。

訪ねたのは西海子小路にある「小田原文学館」。大正から昭和にかけて多くの文化人や政財界人たちが温暖な気候をもとめて小田原に居住した。そ

城下町の格式、旅人を迎えるもてなしの心。

の面影が偲ばれるのがこの高級住宅街である。道の名の「西海子」は木の名だが、現在は桜の並木通りだ。スペイン風洋館の本館には、尾崎一雄、谷崎潤一郎、北原白秋など小田原出身やゆかりの文学者の資料が展示されている。

白秋は小田原に住んだ8年間に『赤い鳥小鳥』など代表的な童謡をのこした。純和風建築の別館「白秋童謡館」では童謡を聴いて楽しめる。文化財に指定されているみごとに建築や庭を眺めながら、文学のエッセンスにひたれる場所だ。

かまぼこに梅干し、工芸品と名産もいろいろ

宿場町、城下町として栄えた小田原は、職人の町でもあり「大工町通り」という名の道もある。

名産のかまぼこ、梅干し、和菓子、かつおぶしなどを売る店は歴史を感じさせる店構えで、「街かど博物館」に選ばれている所は見学することができる。

工芸品では「小田原提灯」が有名だ。童謡『お猿のかごや』のサルがぶら下げた提灯だが、ほかの提灯よりすぐれた点は「折りたたみができる携帯性」のりしろ部分が広く雨や水でもはがれにくい「昔は大雄山の霊木の杉を使い御守りの役目もあった」の3点。提灯はモノ作りにこだわる小田原職人たちの心意気を伝える。私は土産に「ちようちん最中」を買った。

宿場町のもてなしの心と城下町のプライドをもつ小田原は、日本人が今のきびしい時代を生きぬくヒントをたくさん再発見できる旅であった。



小田原といえばかまぼこ。
かまぼこの老舗、小田原籠清。



文化財に指定されている
白秋童謡館。